



大学図書館問題研究会京都支部 第 36 回京都支部総会を開催いたしました

大図研京都支部会員の皆様へ

支部総会を下記の要領で開催いたしました。

記

日 時：平成 25 年 7 月 18 日（木） 19:00 ～ 20:00

※総会終了後、近隣にて情報交換会を予定

場 所： 鍵屋荘（鍵屋町通烏丸西入）

次ページより、当日議決されました、以下の議案と、当日の議事メモ・補足事項を掲載しておりますのでご覧ください。

【第 1 号議案】

2012 年度（2012.7～2013.6）活動総括及び

2013 年度（2013.7～2014.6）活動方針

【第 2 号議案】

2012 年度（2012.7～2013.6）決算案及び

2013 年度（2013.7～2014.6）予算案

【第 3 号議案】

2013 年度大学図書館問題研究会京都支部役員

[目 次]

大学図書館問題研究会京都支部第 36 回京都支部総会を開催いたしました	…	1
大学図書館問題研究会第 36 回京都支部総会議案	…	2
小特集：大図研京都ワンディセミナー「図書館活用法」授業評価活動～明治大学図書館におけるリテラシー教育評価の実践	…	
評価活動と図書館と・・・	佐々木 健二	… 10
できる範囲で楽しんですること	中込 栞	12
ワンディセミナーに参加して	中村 敬仁	14

○ ご意見・ご要望、投稿は下記、電子メールまたは URL へお寄せください。

電子メール：kyoto@daitoken.com（大学図書館問題研究会京都支部）

URL：<http://www.daitoken.com/kyoto/index.htm>

大学図書館問題研究会第 36 回京都支部総会議案

【第 1 号議案】

2012 年度 (2012.7～2013.6) 活動総括及び

2013 年度 (2013.7～2014.6) 活動方針

1. 2012 年度活動総括

(1) 研究交流活動

2012 年度は 2 回以上のセミナー開催を年度目標とし、4 回のセミナーと 1 回の共催の見学会を開催してこの目標を実現しました。ワンディセミナーの 2 回目は大分県別府市の立命館アジア太平洋大学で開催し、大図研福岡支部と交流しました。これらの企画への参加を通じて京都支部に入会した会員は 6 名に上りました。

1) 大図研京都ワンディセミナー

「立命館大学探訪～今話題の「ぴあら」と日本文化デジタル・ヒューマニティーズ
拠点研究の一端に触れる」

日時：2012 年 12 月 15 日 (土) 13:30～17:30

講師：金子貴昭先生 (立命館大学衣笠総合研究機構研究員)

場所：立命館大学衣笠キャンパス ぴあら、アート・リサーチセンター

参加費：大図研会員は無料／非会員は 500 円

参加者数：42 名

2) 大図研京都ワンディセミナー

「APU (立命館アジア太平洋大学)探訪 と 別府湯けむり温泉企画」

日時：2013 年 2 月 16 日 (土)～17 日 (日)

講師：藤谷篤氏 (立命館アジア太平洋大学 APU ライブラリー (委託職員))

西村泰成氏 (長崎総合科学大学)

会場：APU (立命館アジア太平洋大学)、別府温泉

参加者数：17 名

3) 大図研京都支部スピンオフ企画「Code4Lib Conference 2013 参加報告」

日時：3 月 14 日 (木) 19:00-21:00

講師：岡本真氏 (アカデミック・リソース・ガイド株式会社)

会場：鍵屋荘

参加者：18 名

4) 大図研京都ワンディセミナー

「「図書館活用法」授業評価活動～明治大学図書館におけるリテラシー教育評価の実践」

日時：2013 年 5 月 25 日 13:30～16:45

講師：矢野恵子氏 (明治大学 和泉図書館)

会場：池坊短期大学 美心館 5 階 53 教室

参加者数：44 名

5) 「同志社大学ラーニングコモンズ見学会」

日時：2013 年 6 月某日

主催：京都情報図書館学学習会、ku-librarians 京都大学図書系職員勉強会、大学図書館問題研究会京都支部

参加者数：38 名

(2) 支部報

2012 年度刊行分につきましては、発行期日の遅れは生じましたが、計画的発行に努めました。連続企画としての「わたしの図書館紹介します！」や、新入会員が入会するたびに「新入会員挨拶」を継続して掲載してきました。また、ワンディセミナーや近畿 3 支部新春合同例会の報告も掲載するなど、研究交流活動とも連携する形をとっています。

2012 年度発行した支部報の目次は、次のとおりです。

1) 支部報 No.290 (2012/10/15 発行)

- 大図研京都ワンディセミナーのご案内
- 全国大会終了報告
- 大学図書館問題研究会第 35 回京都支部総会議案
- 支部委員挨拶

2) 支部報 No.291 (2012/12/15 発行)

- 大図研近畿 3 支部新春合同例会 2013 のご案内
- 図書館総合展参加報告 (坂本拓)
- 連続企画：わたしの図書館紹介します！
紹介番号 4 京都大学理学部中央図書室 (由本慶子)
- 新入会員挨拶 (森彩乃, 小林奈緒子)
- 緊急予告！大図研京都ワンディセミナー「APU (立命館アジア太平洋大学) 探訪と別府湯けむり温泉企画」のご案内

3) 支部報 No.292 (2013/02/15 発行)

- 大図研京都ワンディセミナーのご案内
- 小特集：大図研京都ワンディセミナー「立命館大学探訪～今話題の『ぴあら』と日本文化デジタル・ヒューマニティーズ拠点研究の一端に触れる」参加報告
 - ・立命館大学 知の拠点で学び考えたこと (角野容子)
 - ・ARC モデルの衝撃とピア・ラーニング (大西賢人)
 - ・始まりはいつも京都から (加川みどり)
- 新入会員挨拶

4) 支部報 No.293 (2013/04/15 発行)

- 大図研京都ワンディセミナーのご案内
- 大図研ワンディセミナー「APU (立命館アジア太平洋大学) 探訪と別府湯けむり温泉企画」参加報告 別府湯けむり深訪記 (河原茂記)
- 大図研近畿 3 支部新春合同例会 2013 「中之島図書館：挑戦の歴史とこれから」参加報告 大図研近畿 3 支部新春合同例会 2013 に参加して (今野創祐)

5) 支部報 No.294 (2013/06/15 発行)

- 大学図書館問題研究会京都支部第 36 回京都支部総会のご案内
- 大学図書館問題研究会京都支部第 36 回京都支部総会議案
- 京都支部委員の募集について
- 大図研京都ワンディセミナー「Library SHIFT! ～Hot な公共図書館最前線の Cool な取組みを Beer 片手にディスカッション!～」のご案内

注: 支部報 No.289 は、2012 年度の発行であるが、2011 年度 1 号議案ですすでに報告済

(3) Web サイト、メーリングリスト、メールマガジン

Web サイトでは、イベントのお知らせや、支部委員会の報告等、支部活動の記録を定期的かつ迅速に掲載しています。また、2011 年度以降、支部報記事の電子化を実施しています。Web サイトは 2013 年 6 月 25 日現在、15,427 アクセスを得ています (アクセスカウンター設置: 2006 年 8 月 22 日)。

メールマガジンは、「大図研京都支部 NewsLetter」として、no.156 (2012 年 8 月 24 日) から no.172 (2013 年 6 月 3 日) を発行しました。支部活動をお知らせするものとして、従来の支部委員会議事録、支部企画案内等に加え、2011 年度からは支部報の発行を目次・概要とともに紹介する記事を配信しています。また、月 1 回のイベント案内を定期的に配信することに加え、支部会員によるメーリングリストの積極的な活用を狙って、試行的に支部委員という立場を離れて、一人の会員という立場から個別にイベント案内を配信しました。

さらに、Twitter の活用を図り、317 アカウントのフォロワーを得ています。忘年会やワンディセミナー告知、支部報や議事録の発行の広報を行いました。

(4) 組織活動

会員数は、2013 年 6 月 25 日現在 67 名で、2012 年度当初よりも 4 名増加しました。特別企画やセミナー開催、個別の勧誘等を積極的に行うなどして、あらたな会員獲得に努めました。結果、来年度加入会員も含めると会員数は 71 名となり、目標会員数 70 名に到達することができました。また、本年目標としておりましたニーズ調査は行なうことができませんでした。

(5) 財務

2012 年度に引き続き、会費納入率の向上に努めていますが非常に芳しくない状況です。所定の会費徴収スケジュールに則った計画的な督促業務を行いましたが、2010、2011 年度総会で宣言した努力目標未納率 0%には至っていません。なお、各年度の未納率は次のようになっています。2008 年度 1%、2009 年度 3%、2010 年度 5%、2011 年度 9%、2012 年度 21% (2007 年度以前は 0%。休会扱い 3 名を含む)。特別研究交流会企画費を執行し、別府にてセミナーを行ないました。

2. 2013 年度活動方針

(1) 研究交流活動

- 1) 会員の発表の場としての研究交流活動の企画に積極的に取り組みます。
- 2) 会員の知的交流の場であると共に非会員への広報でもあるという意味を再認識し、組織拡大への貢献も大きな柱といたします。そのためにも、地域における積極的

な参加を促すため、京都および周辺地域の大学図書館等、関連する組織への広報も継続していきます。

3) セミナー開催頻度としては、2013 年度も年 2 回程度を目標といたします。

(2) 支部報

定期的に年間 6 冊、偶数月の 15 日の発行を目指します。また正確で読みやすい誌面の作成とともに、広く寄稿を求めかつ連載記事を企画することにより、コンテンツの一層の充実に努めます。今後も、会員に「発表の場を提供する」という目標のもと、会員間での情報共有が進むためのきっかけを提供することを目指し、引き続き努力していきます。

(3) Web サイト、メーリングリスト、メールマガジン

京都支部の活動に関する情報をわかりやすくかつ迅速に提供するため、Web サイトを随時更新します。支部報記事の電子化・公開作業、コンテンツの拡充と会員間コミュニケーションの促進強化は今後も継続していきます。

また、メールマガジンについても、より読まれるような内容にする工夫を継続するとともに、Twitter アカウントの積極的活用を継続します。

さらに、メーリングリスト"ゆりかもめ"について、その目的である"会員相互の親睦と交流を盛んにすること"の達成を目指し、会員による自由な投稿を促進するよう検討を重ねます。

(4) 組織活動

常任委員会、全国委員会の大図研将来検討に伴い、支部組織について支部にて再検討する必要があります。京都支部としては継続して活動を行い、支部の持つ魅力を認識し、高め、入会者が大図研京都支部に在籍していることにより一層価値を見いだせるような活動を行います。

(5) 財務

常任委員会、全国委員会の大図研将来検討に伴い、会費徴収の方法について支部にて再検討する必要があります。また、長期滞納者に対し、積極的な督促を行い、未納率 0%を目指します。特別事業費、特別研究交流会企画費を引き続き計上し、会員増を目指していきます。

【第2号議案】

2012年度(2012.7~2013.6)決算案及び
2013年度(2013.7~2014.6)予算案

2012年度決算案(2012.7~2013.6)

総収入	総支出	差引残高
791,095	376,512	414,583

■収入の部

項目	予算	決算	差引額	備考
前年度繰越金	309,539	309,539	0	
2013年度会費	0	91,000	-91,000	13名(@7,000円)
2012年度会費	350,000	308,000	42,000	44名(@7,000円)
未納会費	140,000	56,000	84,000	8名(@7,000円)
セミナー参加費	20,000	18,500	1,500	12月分(@500円×16名) 5月分(@500円×21名)
大図研出版物支部卸 頒布	5,000	8,000	-3,000	会員(@800×10冊)
口座利子	0	56	-56	
合計	824,539	791,095	33,444	

※会費内訳(本部会費4,500円+支部会費2,000円+支部還元金500円)

■支出の部

項目	予算	決算	差引額	備考
会報	60,000	52,800	7,200	印刷16,100円 送料36,700円
研究交流会費	160,000	88,892	71,108	12月(20,150円) 5月(68,742円)
支部委員活動費	30,000	0	30,000	
大図研出版物支部卸購入	6,000	3,080	2,920	うち振込手数料(80円)
事務費	20,000	6,185	13,815	うち会費振込料(2,240円)
HP維持費	3,000	3,000	0	
特別研究交流会企画費	110,000	13,045	96,955	
本部会費	319,500	207,000	112,500	46名(@4,500円)
特別事業費	30,000	2,500	27,500	全国大会割引(@500円×4名)、 セミナー同時入会割引(@500円×1名)
予備費	86,039	0	86,039	
口座税金	0	10	-10	
合計	824,539	376,512	448,027	

2013 年度予算案 (2013.7~2014.6)

□収入の部

項目	予算	備考
前年度繰越金	414,583	
2013 年度会費	399,000	57 名
未納会費	91,000	2012 年度 : 13 名
	42,000	2011 年度 : 6 名
	21,000	2010 年度 : 3 名
	14,000	2009 年度 : 2 名
	7,000	2008 年度 : 1 名
セミナー参加費	20,000	
大図研出版物支部卸頒布	5,000	
合計	1,013,583	

□支出の部

項目	支出	備考
会報	60,000	印刷費 (20,000 円) / 送料 (40,000 円)
研究交流会費	150,000	
支部委員活動費	30,000	
大図研出版物支部卸購入	6,000	5 冊×2 種類 (@600 円)
事務費	20,000	
HP 維持費	3,000	
特別研究交流会企画費	100,000	
本部会費	459,000	102 名 (@4,500 円) うち 20 名前年度未送金
特別事業費	20,000	
予備費	165,583	
合計	1,013,583	

2012 年度大学図書館問題研究会京都支部会計監査報告

帳簿および現金は適正に保管・記載されていた。

2013 年 7 月 18 日

楠見 牧子 (印)

渡邊 伸彦 (印)

決算

※会費納入が遅れ気味となり、のべ 20 名分 2 度目の本部送金 9 万円が行えませんでした。

※新支部会員増のため、特別事業費を利用し、全国大会割引、セミナー同時入会割引を行いました。

※事務費の内訳は主に事務用品と会費振込手数料です。

※福岡支部と合同でセミナーを行い、特別研究交流会企画費を執行しました。

予算

※来年度も島根大学との交流予定のため特別研究交流会企画費を設定してします。

※来年度も会員増のため特別事業費を設定しています。

※さ来年度の大図研将来検討に伴い、支部は研究グループとなり、支部会費は本部会費と別途徴収が必要となる可能性が高くなっています。会費徴収方法が変更される見込みであることや支部会員減少の可能性も高く、予備費を積みましています。

【第3号議案】

2013 年度大学図書館問題研究会京都支部役員

支部委員 (50 音順)

- 安東 正玄 (立命館大学図書館)
大瀬戸 貴己 (奈良県立医科大学附属図書館)
金森 悠一 (京都教育大学附属図書館)
小林 奈緒子 (島根大学附属図書館)
坂本 拓 (京都大学附属図書館)
辰野 直子 (国際日本文化研究センター図書館)
寺升 夕希 (滋賀医科大学附属図書館)
長坂 和茂 (京都大学工学研究科・工学部桂化学系図書室)
野間口 真裕 (京都大学附属図書館)
花川 尚子
原 健治 (同志社大学図書館)
原竹 留美 (京都大学附属図書館)
山上 朋宏 (京都大学附属図書館)
山下 ユミ (京都府立医科大学附属図書館)

監査委員

- 今野 創祐 (京都大学附属図書館宇治分館)
富岡 達治 (京都大学人間・環境学研究科総合人間学部図書館)

全国委員

- 長坂 和茂 (京都大学工学研究科・工学部桂化学系図書室)

特別支部委員

- 赤澤 久弥 (京都大学附属図書館)

＜大学図書館問題研究会第 36 回京都支部総会 議事メモ・補足事項＞
出席者 14 名

会員の皆様に支部総会当日の様子を知って頂くために、簡単に当日の様子をお知らせします。

1. 各担当より、第一号議案について説明があり、原案のとおり了承されました。
しかし、(2)支部報 の箇所にて、支部報 No.294 の記載漏れがあったため、追記することとなりました。
2. 野間口支部委員から、第 2 号議案について説明があり、原案のとおり了承されました。
なお、以下の補足説明がありました。
 - ・ 2012 年度は、特別研究交流会企画費を執行して、福岡支部との合同のセミナーを開催した。九州での開催であったが、セミナーの会場費等のみ上記企画費から支出し、参加者の交通費・宿泊費等は、参加者自己負担の形で開催した。2013 年度も、島根大学との交流を予定しており、そのためにこの予算を計上している。
 - ・ 2013 年度予算案：注記にもあるが、支出の部における予備費が増額している。この理由は、2013 年度より、会費の徴収方法について、全国的に大規模な変動が起きる可能性があるが、その場合も当面は従来どおりの支部活動ができるようにしたためである。
 - ・ 同予算案の本部会費の金額が大きくなっているが、毎年、年度の変わり目は送金のタイミングが難しい。次年度は、曜日の並びに関係なく、6 月 30 日に送金するようにしたい。
3. 支部委員、監査委員、全国委員については、第 3 号議案のとおり選出されました。
なお、京都支部からこれまで常任委員として選出していた大綱特別支部委員に代わって赤澤委員を送り出すことになりました。そのため特別支部委員も、大綱委員から赤澤委員に変更しています。また、2013 年度は新規に 4 名の支部委員が加わることになり、合計 14 名の体制で臨むことになりました。
4. 現在、全国委員会にて大きく議論されている会費徴収方法の変更について、支部会員にも詳細を把握していただく必要があるため、山下支部長と長坂全国委員からこれまでの経緯と現状について報告が行われ、非常に活発な意見交換が行われました。

小特集 : 大図研京都ワンディセミナー「図書館活用法」授業評価活動～明治大学図書館におけるリテラシー教育評価の実践 参加報告

評価活動と図書館と・・・

佐々木 健二

2013年5月25日(土)に池坊短期大学にて大学図書館問題研究会 京都支部ワンディセミナー「「図書館活用法」授業評価活動～明治大学図書館におけるリテラシー教育評価の実践」が開催されました。今回のセミナーでは明治大学の矢野恵子先生より、リテラシー教育における評価方法について、明治大学で行われているリテラシー教育授業「図書館活用法」での評価活動の実践を通してお話していただきました。

リテラシー教育については色々なところでお話を聞きますが、その評価方法についてはあまり知る機会が少なかったもので、今回のセミナーではとても有意義なお話を聞くことができたと思います。以下、セミナーの概要と私の感想をご紹介します。

<「図書館活用法」と評価活動について>

「図書館活用法」は1年生から4年まですべての学生が受講可能な「学部間共通総合講座」の授業の1つであり、4つあるキャンパスの全てで開講されています。教員と図書館職員が協働で行う講義と演習を組み合わせた授業として、平成12年度からはじまりました。平成19年度に「図書館活用法」は文部科学省による「特色ある大学教育支援プログラム」に採択され、それを機に組織的・体系的な評価活動を開始します。

ここでの評価活動とは、対象のプログラムについて「共通理解や改善を図ったり、価値を明らかにしたり、存続を判断したりと、多様な目的のためにプログラムに関する情報を系統的に収集する活動」を指します。評価するために必要なデータの収集方法は、統一テストといった単一的な方法に限らず、インタビューやアンケートといった様々な方法を取り入れます。

評価活動の流れは以下のとおりです。

1. 評価目的の設定
2. 評価目的を達成するために解決すべき課題の具体化
3. 具体化された課題を解決するための情報収集と分析
4. 改善取り組み

ここで気をつける点は評価目的を明確にすることです。評価というと、「どのように評価するか」と手段を考えがちですが、「なぜ評価するのか」を考えることで、適切な評価方法を検討することができます。また最初から完璧な評価活動を目指さずに、実行可能な範囲で行うことが大切とのことです。

「図書館活用法」では以下の3つの段階で評価活動を行いました。

1. 平成20-21年度：学習目標の設定とカリキュラムの設定
2. 平成22-23年度：授業改善
3. 平成24年度：授業効果測定

<評価活動 フェーズ1：学習目標の設定とカリキュラムの設定>

フェーズ1の評価目的は以下のとおりです。

- 「図書館活用法」の学習達成目標を明示する
- 学習達成目標を明確化し、カリキュラム内容と構成を改善する
- 大学全体における情報リテラシー教育の目指すものを明確し、その中で図書館の教育的役割を提言する

そして、この評価目的を達成するために解決する課題は以下のとおりです。

- 学生・「図書館活用法」 教員・図書館・図書館以外の学内組織の学習/教育ニーズから見られる学習達成目標とは何なのか？
- 現在の学習内容で学習/教育ニーズが反映されているか？

以上の 2 つの課題をさらに掘り下げて課題をより具体化していきます。

課題が明確になったところで、それらを解決するための情報収集を行います。ここでは①授業履修学生、②授業講師および図書館員、③学部教員、④大学組織(各学部の学部教務主任等)といった、図書館以外の組織を含めた 4 つのグループに対してオンライン上でアンケートを実施しました。そこで得た情報を分析することで、課題を解決し、学習達成目標の明治とカリキュラムの改善を行いました。

<評価活動 フェーズ 2 : 授業改善>

フェーズ 2 では、フェーズ 1 で設定した学習達成目標を学生が達成したかをはかり、授業内容の改善を行います。情報を収集するために、学習達成目標の項目に対応した総合テストとアンケートの分析を実施しました。加えて、アンケートやテストだけでは読み取れない学生の意見を吸い上げるために、フォーカスグループを実施しました。ここで得た結果を反省し、次期の授業に活かして授業改善を行いました。

<評価活動 フェーズ 3 : 授業効果測定>

フェーズ 3 の評価目的は以下のとおりです。

- 「図書館活用法」の効果を図り、明示する
- 「図書館活用法」の履修次期(学年)はいつが最も効果的かを探る

以上の評価目的を達成するために解決すべき課題は以下のとおりです。

- 「図書館活用法」を履修した学生が、授業の内容をその後の学習・研究に役立て、それが良い結果をもたらしたか？
- 「図書館活用法」授業の内容は、大学生活(授業や授業に関する勉強以外)において役に立ったか？
- 授業は全学年の学生が履修できるが、何年次に履修するともっとも効果的か？

以上の課題を解決するために、「図書館活用法」の履修者で平成 24 年度に 4 年生となる学生にアンケートを実施しました。その結果より、学習・研究に役に立つ技術を得ることができたと感じる学生が一定数いること、また履修時期は 1 年次が効果的であること等が明らかになりました。

<感想>

今回の評価活動の実践のお話を聞いて印象的だったのは、評価活動をする際に、図書館以外の組織が図書館と「図書館活用法」に何を求めているかをしっかりと把握して行われていた点です。図書館が授業に直接関わる場合、図書館は学生に何を教えるべき・教えたいのかについて中の人間だけで考えてしまいがちですが、大学図書館が大学の組織の一部であるという認識を見落としてしまうと、大学全体の方向性から外れた空回りの授業になってしまう可能性があることをあらためて気づかされました。

もう一つ印象的だったのは、評価活動を行う際には「完璧を目指さず、いい意味での『いい加減さ』で行ってほしい」という言葉です。今回の評価活動は平成 20 年度から平成 24 年度までの長期的な取り組みですが、それでもアンケートの回収率が満足とは言い切れなかったり、客観的に「図書館活用法」がどのように学生に良い結果をもたらしたのかといった点についてはまだ課題が残っており、評価活動としてまだ改善の余地があるとのことでした。それでも、まずは実行可能な範囲でやってみようという姿勢が、少しずつ、授業の改善につながっていくのだなと思いました。

今回のお話は昨年度まで取り組みまででしたが、また今後のお話をどこかで聞けたらと思います。今回の企画を開催いただきとても勉強になりました。ありがとうございます。

した。

参考文献：

- 斎藤哲「大学図書館の利用教育を考える」『図書の譜』Vol.6
- 大野友和「図書館リテラシー教育と学生の反応」『図書の譜』Vol.7
- 久松薫子[他]「「図書館活用法」プログラム評価活動報告」『図書の譜』Vol.13 pp.35-50
- 矢野恵子,久松薫子「「図書館活用法」プログラム評価活動報告(2)」『図書の譜』Vol.15 pp.1-19
- バーバラ・ウォルワード著；山崎めぐみ，安野舞子，関田一彦訳、『大学教育アセスメント入門-学習成果を評価するための実践ガイド-』、ナカニシヤ出版、2013.

ささき けんじ（京都大学附属図書館）

小特集：大図研京都ワンディセミナー「図書館活用法」授業評価活動～明治大学図書館におけるリテラシー教育評価の実践 参加報告

できる範囲で楽しんですること

中込 菜

2013年5月25日に大図研京都支部ワンディセミナーに参加させていただきました。明治大学和泉図書館の矢野氏がわざわざ東京から講師としてお越しくださり、非常に興味深いお話をお聞きすることができました。まだまだ初心者の私の視点ではありますが、今回のセミナーの参加報告をさせていただきます。

目的を常に意識し、設定すること

私がこの「図書館活用法」評価活動の事例を伺い、最も感銘を受けたのは全ての評価活動において一貫して評価の目的を意識しておられたことです。非常に重要な部分で当たり前のことなのかもしれませんが、まだ組織としてまた仕事として大きな評価活動というものをあまり経験したことがない私にとっては、それを意識し続けることの重要性を学ぶことができました。

「図書館活用法」評価活動は3つのフェーズに分かれており、それぞれのフェーズ毎に評価の目的をはっきり示しておられました。フェーズ①では学習達成目標を明示し、カリキュラム内容の構成を改善し、大学全体における図書館の教育的役割を提言するという目的を設定しておられました。それをさらに掘り下げて学生・図書館活用法教員・図書館・図書館以外の学内組織の学習/教育ニーズに見られる学習達成目標とは何か、そして現在の学習内容で学習/教育ニーズが反映されているのか、という2つの解決すべき課題を見出してらっしゃいました。目的を念頭に置き、それを具体化して課題を見出し、さらに細かく課題を掘り下げるところまで考えてから、課題を解決するための情報収集を行うというプロセスがしっかりと行われておりました。その成果として、(ともしれば授業履修学生のニーズのみ、または授業者である図書館員側のニーズのみに偏りがちだと思われるのですが) 授業履修学生、授業講師および図書館員、学部教員、大学組織…とさまざまな視点から見て共通する学習達成目標を設定できたというのは素晴らしいことだと思いました。

フェーズ②では学習者が学習達成目標に到達したか測り、授業内容の改善を行うことが目的として設定されておりました。そのために学習達成目標の項目と対応した総合テストとアンケートを分析することが課題とされました。また、アンケートやテストから

だけでは学生の真意が読み取れず、分析にも限界があるということでフォーカスグループインタビューも実施されたということでした。フォーカスグループ実施にあたっては、その妥当性や方法を学ぶワークショップを開催したそうです。また「評価」についての勉強会や、テストやアンケート分析のワークショップも開催したということで、この点も印象的でした。

フェーズ③では図書館活用法授業の効果を測り、最も効果的な履修学年を探るという目的を設定され、図書館活用法授業を履修した学生が、授業の内容をその後の学習研究に役立てられたのか、学習研究以外の大学生活において役立ったのか、また何年次に履修するのが効果的かという課題を設定され、アンケートを行い、分析をされていました。

評価というとアンケートやテストなどまず情報収集のツールを作成することに意識が行きがちだと思われそうですが、明治大学での実践のようにまず大きな目的を定め、それを掘り下げて課題を設定していき、掘り下げきったところで、その課題を解決するためのツール（アンケートやテスト、インタビュー等）を選び、情報収集を行っていくことが一貫した目的に見合う妥当な評価を行う上で重要なのだと感じました。

評価の制約を見極めること

今回の報告では今までの実践で足りなかったところも率直にお話いただきました。例えば、フェーズ②のフォーカスグループで集めることのできた人数が少なく、フォーカスグループの想定より少ない人数であったこと、また複数回開催することができなかったこと、緊張した雰囲気となってしまうフランクに意見交換をするには少し難しさがあったことなどや、フェーズ③のアンケートでは、ランダムサンプリングができず、「アンケートに答えよう」というある程度意思を持った集団に留まってしまったことなどを挙げておられました。以上の点を加味して、今後の課題を設定されており、行った評価方法の限界を踏まえることで、次回への課題も明確になるのだと感じました。

そもそも評価を行うこととは

何らかの教育プログラムとそれに対する評価は必ずセットだと考えられます。特に授業として教育プログラムを行う場合、学習者をテスト等で評価することに加え、よりそのプログラムの質を向上させること、そして外へ向けてその授業の効果を説明するためには、何らかの評価活動を行わなくてはなりません。明治大学での「図書館活用法」評価活動が始まったきっかけは特色 GP 申請が不採択となったことだと伺いました。教員ではない私たち図書館員提案の授業にとって、継続して充実した内容にしていくためには図書館外部の方々に認めてもらうことが重要なのだと感じております。私の所属している京都大学工学部でも形式は異なりますが、学術情報リテラシー授業を行っております。その授業は学術情報リテラシー授業を行うことの意義を工学部の教育カリキュラム等を検討する教育制度委員会の先生方に認めていただいて、依頼を受けている授業です。そのため、授業の意義・効果を確認するために授業の最後にテストとアンケートを行っております。現在そのテストとアンケートの集計作業を業務として行っておりますが、今回伺った事例や方法論を参考により妥当な評価に結び付け、よりよい内容にしていきたいです。

できる範囲で楽しくやること

おわりに、で矢野氏は「教育評価は怖い？ 教える側が「評価されている」ようで怖い。その一方、自分のやっていることが学生にどのような影響を与えているか分かるので楽しみ。」(いただいた配布資料、スライド 49 より)とおっしゃっています。確かに評価は怖いもので、私もテストとアンケートを集計していると、辛辣な意見や厳しい成績に出会い落ち込むことがよくあります。私はまだ授業者としては担当していませんが、補助者としてすべきことがもう少しあったのではないかと反省はつきません。しかし、同時に授業が学生さんに非常に良い影響を与えたと思われるコメントもあり、毎回

集計作業を行う時はどきどきしています。

日常業務を抱える中で授業を行うのは本当に大変なことなのだということが、この3か月の先輩方の姿からひしひしと伝わって参ります（ですが皆さん個性のあるとても素敵な授業をされます、毎回勉強させてもらっています）。この上評価を明治大学のようにしっかり行うのは厳しいと言わざるを得ません。ですが、完璧を目指すのではなく、できる範囲で評価を行っていくことで少しずつ授業をよりよくしていき、まだ2年目のはじまったばかりのこの授業活動が、組織として継続していけるよう取り組んでいきたいと思えます。

最後に、非常に勉強となる講義をしてくださった矢野さま、そしてこのセミナーの企画・運営をしてくださった大図研京都支部のみなさまに心から感謝申し上げます。どうもありがとうございました。

なかごみ しおり（京都大学工学研究科図書掛）

小特集 : 大図研京都ワンディセミナー「図書館活用法」授業評価活動～明治大学図書館におけるリテラシー教育評価の実践 参加報告

ワンディセミナーに参加して

中村 敬仁

大図研京都ワンディセミナー「図書館活用法」授業評価活動～明治大学図書館におけるリテラシー教育評価の実践に参加させていただきました。大図研京都のワンディセミナーに参加するのは、昨年の「立命館大学探訪～今話題の「ぴあら」と日本文化デジタル・ヒューマニティーズ拠点研究の一端に触れる」に参加以来今回で2度目です。私は図書館に異動して約1年が経過したところで、まだまだ図書館のことがわかっていませんので、このワンディセミナーのような企画に積極的に参加して視野を広げていきたいと思っております。今回は、「図書館活用法」というところに興味があったこと、関東の大学図書館の方のお話を聞く機会がないため、これは是非にという思いで非会員ながら参加させていただいた次第です。なお、セミナー後の懇親会時に入会させていただきましたので、現在は会員となりました。今後もよろしく願いいたします。

前置きが長くなりましたが、セミナーの内容について報告させていただきます。テーマは授業評価活動であったのですが、私の興味が「図書館活用法」にあったため、まずはその報告となることをご容赦ください。

今回お話をお伺いした評価活動を行っておられる授業「図書館活用法」は2000年に学部間共通総合講座の一授業として始まったということでした。単位認定の授業であるためコーディネーターとして教員が授業担当者ですが、実際の授業は図書館員が行うというもので、教員職員間の信頼関係があり教職協同がうまく進められている好事例といえるでしょう。詳しくは、明治大学図書館紀要『図書館の譜』第6号参照ということでしたので、次の日にホームページで確認させていただきました。この図書館紀要は1997年に創刊され、その創刊号で当時の図書館長後藤総一郎先生が、「図書の、思想の、学問の原初からたずね歩くといういわゆる書誌学的世界から、思想の根源から改めて問いなおす作業を通して、新たなる「知」の創造への舞台を用意しておこうという意図で編集されたもの」と「知」の創造一創刊にあたって一で紹介されていました。大学図書館がどのようにあるべきかを、図書館に関わる教職員が自ら考え行動し、その内容を公表す

ることで評価を受けるという場がまずつくられたこと。また同時期から「図書館スタッフ研修会」と呼ばれる館長、副館長、図書委員、部課長、事務スタッフによる政策会議体が組織され、その中で「学生の活字離れ」、「高度情報化—情報格差」、「図書館の教育・学生支援機能」、「図書館リテラシーへの組織的対応」、「図書館員の使命と業務能力の向上」などが議論されていることが、明治大学図書館紀要『図書館の譜』第6号や平成18年10月、11月に行われた学術情報リテラシー教育担当者研修の講義資料からわかりました。講師からはバックグラウンドとしての紹介でしたので、概略の紹介でしたが、上記のような基盤があるからこそ「図書館活用法」が生み出されてきたものであると感じました。

次に本題である評価活動についてですが、評価活動の総論と各論として実践フェーズを3段階に分け、フェーズ①「学習達成目標の設定とカリキュラム改革」2008-2009年度、フェーズ②「授業改善」2010-2011年度、フェーズ③「授業効果測定」2012年度と紹介いただきました。

私は、この評価活動の具体的なお話を伺う中で、理論的な部分についてはeラーニングにおける「インストラクショナル・デザイン」の手法に近いものではないかと感じました。「インストラクショナル・デザイン」は、教育プロダクトを系統的に企画、設計、開発、実施、評価に関する手法で、CBT (Computer Based Training)、WBT (Web Based Training) の開発にあたってよく利用されており、大学で情報処理関係の仕事をされていればよく耳にする言葉であると思います。講師からフェーズ①において学習達成目標(33項目)の設定が具体的に記述されているとの紹介がありましたが、『インストラクショナル・デザイン入門』(ウィリアム W. リー、ダイアナ L. オーエンズ著、清水康敬監訳、東京電機大学出版局、2003年3月)のP49で学習領域での目標記述の項目に「表9.5 目標を設定する順序」が紹介されており、「ゴールとコース目標」では、「コース全体のゴールを1つか2つの文で簡潔に述べる。コース全体の終了後に、学習者は何(KSA: Knowledge, Skill, Attitude)を知り、何(行為・職務遂行)ができるようになるかを明示する。目標には学習者の立場で目的とする学習結果を記述する。」と解説されています。これは一例ですが、「図書館活用法」が理論と実践に基づき運営されていることが感じられる内容でした。

私にとって、講演そして講演後も感心しきりの内容でした。講演のおわりに述べられた「不完全でも評価により一歩も二歩も前進」や「完璧を目指さず」、「組織的なサポートが必要で、かつ自分が楽しんでやる」に背中を押してもらい本学図書館でも何らかのアクションを起こせればと思っております。

最後になりましたが、非常にわかりやすく丁寧にお話しいただいた講師の矢野恵子さんにお礼を申し上げるとともに、セミナー参加の機会を与えていただきました大図研京都支部の役員の皆様にお礼申し上げます。

なかむら たかひと (京都橘大学図書館)

◇ 会費納入のお願い ◇

会員のみなさまにおかれましてはご健勝のことと存じます。

大図研会費および京都支部会費の納入をお願いしているところですが、納入率は依然思わしくない状態にあります。既に2013年度（大図研会計年度2013.07－2014.06）に入っておりますので、2013年度の会費の納入をお願い致します。また、2012年度以前の会費をお納めいただいていない会員のみなさま、一刻も早い会費の納入にご協力いただきますようお願い致します。

会費は、¥7,000（大図研会費：¥5,000＋京都支部会費：¥2,000）です。

会費は下記口座に郵便振替でお送りいただくか、お近くの支部委員におことづけください。

郵便振替振替口座番号 01090-4-5904 大学図書館問題研究会京都支部

また、ご不明な点は大学図書館問題研究会京都支部（kyoto@daitoken.com）まで。